

群 教 セ	F09 - 01
	平16.224集

## 仲間との結びつきを深める支援の工夫

- 学年及び「ほっとルーム」での体験学習を通して -

特別研修員 當山 哲也 (太田市立北中学校)

### 《研究の概要》

本研究は、学年集団や不登校生徒が様々な体験学習に取り組み、自分やグループの行動について振り返りをする中で、友達の新しい一面を発見したり、自分の課題に気づけたりしてきた。その結果、互いをよりよく理解し、仲間との結びつきが温かいつながりの強いものとなった。そのことが、学年・学級集団においては不登校を予防し、不登校及び不登校傾向にある生徒には、学校や友達に目を向けるきっかけへとなっていった。

【キーワード：教育相談 中学校 不登校 体験学習 ほっとルーム】

### 主題設定の理由

本校の不登校生徒及び不登校傾向にある生徒は、各学年とも数名ずつおり、大きな課題となっている。これらの生徒のうち、多くは小学校から不登校の状態が、そのまま中学校でも継続している事例である。もちろん、人間関係のトラブルなどから突然、不登校になる生徒もいる。この背景には、生徒自身のストレスをコントロールする力や人間関係を作る力が弱くなっていること、学ぶことの意味を見いだすことができなくなっていること、学校に対し無関心な保護者が増えていることなどがあるように感じられる。

また学校としても、相談室登校をしている生徒に対し、限定された教師のみが対応にあたる事が多く、十分な指導体制がとれないでいること、比較的限られた人間関係で生活している生徒に対し、それを改善する指導・援助が十分できていないことなどの課題が挙げられる。その結果、一度不登校の状態になると、ほとんど学校、学級復帰できなくなってしまうケースは少なくない。そこで、何より不登校にならないようにすることが大切だと言える。つまり、生徒が不登校とならない、生徒にとって魅力ある学校を目指すことに力を注ぐべきと考える。具体的には、生徒にとって、自己が大事にされている、認められているなどの存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる場所として、また、教師や友達との心の結びつきや信頼感の中で主体的な学びを進め、協働の活動を通して社会性を身に付ける場として機能する魅力ある学校である。

そこで、本研究では、「総合的な学習の時間」などを活用しながら、生徒が興味を持ちやすい体験学習を取り入れ、仲間との関係を深めていけるような有効な取り組み方や、生徒の成長を促す支援・指導の方法を探していく。その結果として、学年集団では、仲間同士が深く結びついた学年・学級づくりを目指していく。また、不登校生徒には、「ほっとルーム」としての独自の体験活動や本市教育委員会が実施する不登校対策事業の体験学習との連携を通して、友達と協力する楽しさを味わうと共に、学校の中に自分の居場所を作ることで、友達や学校に目を向けることができるようにしていく。

以上の取組を通して、仲間との結びつきが深まる手だてとして、体験学習が有効であることを明らかにするために本主題を設定した。

## 研究のねらい

学年集団、または相談室登校生徒が体験学習を通して、仲間とのつながりをより一層深めていくための有効な取り組み方や、生徒の変化や成長を促す支援・指導の方法を、実践を通して明らかにする。

## 研究の見通し

- 1 学年の生徒を対象とし、グループ活動を中心とする体験学習を実施することで、自分を見つめ直すことになったり、仲間のことをより理解することとなり、それが互いに深いつながりの関係を形成するきっかけになるであろう。
- 2 不登校生徒が体験学習で、開放感のある教室外での活動や、日頃の学習とは違った興味・関心を抱きやすい内容に仲間と一緒に取り組むことで、自分以外の存在を意識するようになり、それが仲間や学校に目を向けることになるであろう。

## 研究の内容と方法

### 1 研究の内容

#### (1) 「体験学習」について

グループで一つの目標に向かって、他人と協力して作業をするような機会を与えることで、人とかがかわることへの苦手意識を克服させたり、他人との関係の中での自己の存在を感じ取り、対人関係の改善をねらいとするものである。また、体験学習は『気づき』の学習であり、体験を通して、自分や他者のこと、お互いのかかわり方、グループのことなどに気づくことから自分の言動を考え、必要があれば、意識的に言動を変えていこうとするきっかけになるものと考えられる。この体験学習の特徴を生かすことで、学級・学年内のつながりをより深めていく。

#### (2) 体験学習への取り組み方

体験学習をより有効な取り組みとするために、図1のような体験学習のステップを踏む。これは、体験学習を実施した後、自分やグループが見たこと、感じたことを指摘する（指摘）。そして、なぜそのようなことが起きたのかを考えることで問題点を見つける（分析）。最後に、その問題点を改善するために、どのような行動をとればいいのかを考える（仮説化）。

この循環過程を生徒と一緒に考え、必要に応じ

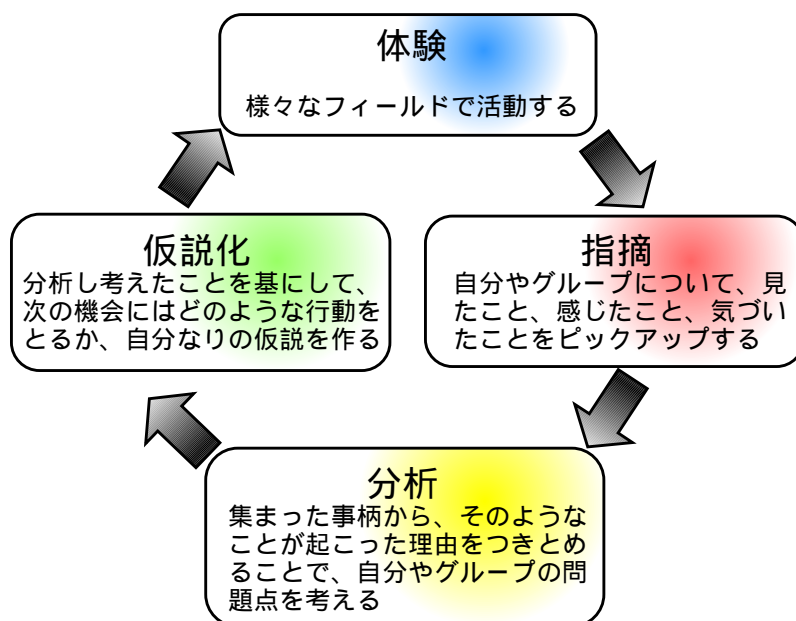


図1 体験学習の循環過程

て、声かけをしていくことで、体験を通して学んだり発見したことが次の新しい場や機会でも、積極的に試みられるようにしていく。このような学習のステップを繰り返していくことで、自分の課題が克服され、仲間同士のつながりが深まっていくと考える。

### (3)地域の外部人材の利用

指導者についても教員に限らず、外部の専門的な技能を持った多様な人材の協力を得るなど、地域社会の教育力を積極的に活用していく。特に、不登校生徒にとっては、第三者的な立場の外部講師のほうが、身構えずに接することができる場合も少なくないと考える。このような取組を通して、学校と社会とのつながりを強めたり、生徒にふだんの授業とは違った学習の機会を提供していく。

## 2 研究の方法

### (1) 全体構想図

相談室登校をしている生徒が所属学年の体験学習に参加することは容易ではない。そこで、ほっとルームとしても独自の体験学習を実施することで、学年の取組と同様に仲間との結びつきを深めていけるようにする。また、その体験が、学年での取組にも参加する意欲へとつながっていくようにする(図2)。

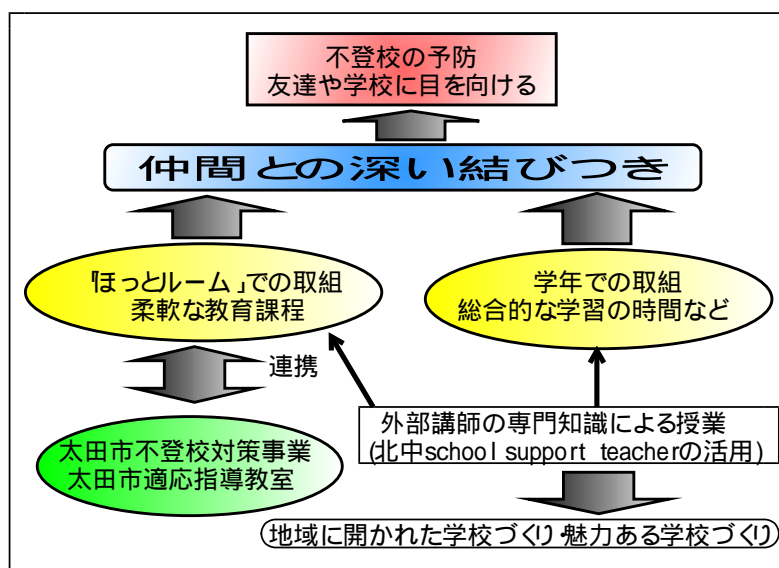


図2 全体構想図

### (2) 実施計画

具体的な体験学習を実施

する機会としては、表1の計画とする。3年生の体験学習には、相談室登校をしている3年生(男1名、女2名)も一緒に参加できるように働きかけていく。そして、体験学習実施後は各ステップにおける振り返りを記入したり、感想を書かせたりして、自らの新たな気づきを促す。そして、それを新たな視点として次回に生かせるように支援していく。

表1 実施計画

月	3年生の体験学習 総合的な学習の時間	ほっとルームでの体験学習 柔軟な教育課程
6	そばづくり s.s.t: 元PTA会長他4名	ゆったり乗馬体験(市不登校対策事業)
8		赤城大沼で船を漕ごう(市不登校対策事業)
10	尾瀬ハイク s.s.t: 尾瀬ネイチャーガイドの会 8名	リンゴ狩り・ものづくり体験 (市不登校対策事業)
12	第2回そばづくり s.s.t: 元PTA会長他4名	華道・茶道体験(全5回) s.s.t: 北中協力委員会の方 1名 太田市適応指導教室との連携

## 実践の概要及び結果と考察

### 1 実践の概要

#### (1) そばづくり体験

対象生徒：3年(72名)

実施日：6月15日(火) 3・4校時

外部講師：4名(元PTA会長他地域の方々)

ねらい：3人1組のグループで、そばづくりを通して、グループのメンバー同士の交流を図り、互いを理解し合うことで関係を深めていく。



図3 そばづくりの様子

#### 体験学習の様子

今回のグループ作りは、最近、交友関係の固定化が感じられることもあり、新たな人間関係づくりをするために任意のグループとした。ふだんあまり親しくない生徒同士の班もあり、最初はとまどっている様子が見られた。そばづくりは思ったよりも重労働で、協力しなくては作業が進まない。講師も必要以上には口を挟まず、そのグループごとに任せただけで、生徒同士でどうすればいいかを相談したり、作業の分担を話し合ったりする様子が見られた。図4は、

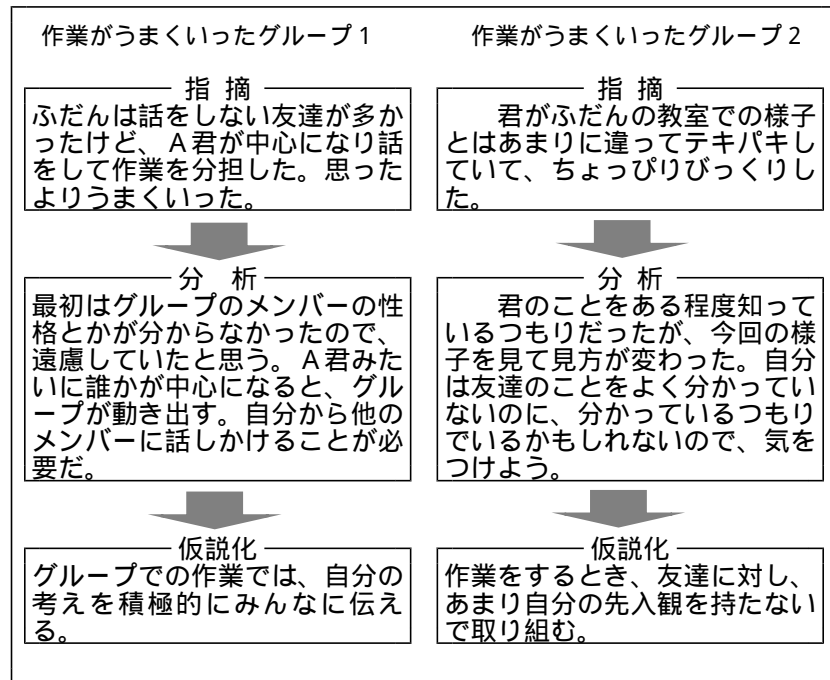


図4 各ステップにおける振り返りの例

作業が比較的うまくいった2つのグループの実施後の学習のステップにおける振り返りである。図5は、感想をまとめた結果である。また、相談室登校の男子生徒は、実施日が近づいてから知らせた方が、余計な神経を使わずによいと思い、直前になって知らせた。しかし、「グループのことが気になり、心の準備ができない」ということで、活動場所のすぐ近くまで来て様子を見ていたが、結局参加することができなかった。その日の放課後2人で話をした。そこから、教師の働きかけが、とにかく参加させることに意識がいきってしまい、半ば強制的になってしまったことに気づき反省した。そこで今回は、「参加したいと思ったら参加すればよい。自分がそう思うようになるまで待っている」ということを伝えた。

一人では大変なことも協力すると何とかできることがわかった。  
ふだんあまり話をしない人と話することができた。  
そばづくりは簡単だった。将来、もう一度やってみたい。  
ふだんの授業では体験できないことなので、やれてよかった。  
みんなしっかりしているなあ。  
親しい友達同士のほうがよかった。

図5 生徒の感想

(2) 尾瀬ハイク

対象生徒：3年(73名、相談室登校生徒1名参加)

実施日：10月6日(水) 6:00～18:00

外部講師：8名(尾瀬ネイチャーガイドの会)

ねらい：自然豊かな紅葉の尾瀬をグループごとに散策することで、いつもとは違う雰囲気の中、仲間との交流を深める。

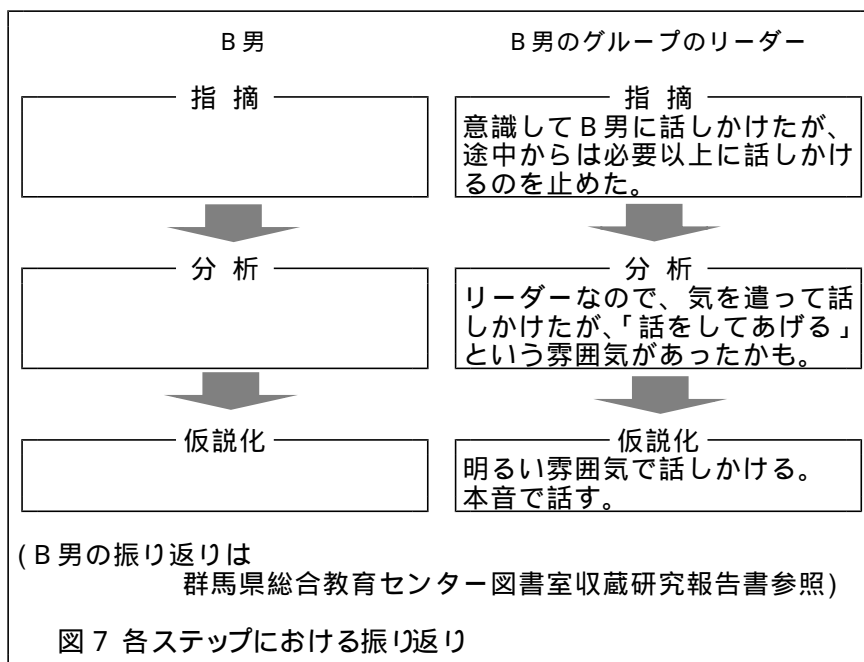


図6 尾瀬ハイクの様子

体験学習の様子

小雨が降るあいにくの天候ではあるが、尾瀬ハイクが実施された。今回のグループは9名前後。そこに、教師1名、ガイド1名が付く。今回もグループを任意にしたのは、前回のそばづくりのときに、親しい友達同士のほうがよかったという感想を書いた生徒もいたが、今まであまり親しくなかった友達と一緒に作業などをすることで、新しい一面を発見することができたと言った生徒もいたので、この気づきを生かしていこうと考えたためである。そこで、

事前に前回の体験学習で得られた「友達の新しい一面」を説明して理解を促した。その結果、生徒は前向きにとらえてくれたようだった。今回は、相談室登校の男子生徒1名が参加することができた。尾瀬に興味があったことも参加できた要因だと思うが、前回のそばづくりの反省を生かし、他の生徒よりも事前に趣旨を説明し、参加を促した



尾瀬ヶ原はイメージよりも広いところでした。木道を歩きながら班の人といろいろな話をしました。みんないつもより真面目に話をしていたような気がします。おかげで友達の新しい一面を見ることができました。

仲の良い友達とのグループもいいけど、今回のようなグループもそれなりに楽しめる。クラスではおとなしい奴が、いきなりはしゃぎまくってたりした。あまり話はしなかったけど、みんなとの距離が短くなった気がする。またクラスでいろいろやってみよう。

図8 生徒の感想

の振り返りである。誰に対しても分け隔てなく接することができ、責任感も強い生徒をB男のグループのリーダー役に指名し、なるべく声かけをしてくれるように頼んだ。図8は、参加した生徒の感想である。

### (3) 華道体験(第1回)

対象生徒：不登校生徒 3名

実施日：12月20日(月) 3・4校時

外部講師：1名(北中 S.S.T)

ねらい：華道を通して、みんなで同じ作業と一緒に取り組む楽しさを味わったり、できた作品を見合うことで自分や友達存在を認め合う。

#### 体験学習の様子

3名の生徒が参加した。講師の先生には、事前に参加する生徒の学校での様子や、この活動を通して個々に体験させたいことを伝えた上で指導していただいた。生徒は皆、緊張していた様子だが、事前の打ち合わせや不登校生徒に対して理解のある講師の上手な場づくりもあり、すぐに緊張感もほぐれ、楽しい雰囲気で行われた。最初は気が向かない様子も見られたが、自分の作品づくりに取り組んだ。最後に自分の作品の説明と感想を話し合った。その作品は、各自が校舎内のどこか好きなところに飾ってみようと提案したところ、図書室、職員室を選んだ。いずれも彼らにとって、親しい先生がいる場所であった。その先生たちにも事情を話し、今回の華道体験について話をする機会を持ってもらった。また、今回、太田市適応指導教室と連携し、教室に通っている生徒も、先生と一緒に参加できるよう準備しておいたため、参加することができた。

(中略 詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)

### (4) 茶道体験(第1回)

対象生徒：不登校生徒 5名

実施日：1月27日(木) 3・4校時

外部講師：1名(北中 S.S.T)

ねらい：茶道を通して、みんなで同じ作業と一緒に取り組む一体感を味わうことで、友達のよさを感じる。

#### 体験学習の様子

華道に参加した3名の生徒に3年の女子2名が新たに加わり行われた。講師の先生は華道のときと同じ先生。一人ずつお茶を入れてもらう間、5名はずっと正座をしていた。楽しい雰囲気の中でお茶の作法を学んだ。また、興味を持った北中の先生3名と一緒に参加していただいた。

(中略 詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)

## 2 結果と考察

### (1) 体験学習は、生徒の結びつきが深まるきっかけになったか

そばづくり体験を通して、生徒は、グループで協力して作業を進めるためには、互いを理解することが大切であり、そのためには自分の考えを積極的に伝えていくことが必要であると気づいた。また、ふだんとは違う一面を見せた友達が自分の友達に対する見方を改めるきっかけを与えたりした。これらは、相手をより理解していくことにつながるものである。

各体験学習を通して、不登校生徒は、現状からの変化、つまり仲間との交流を図れるようになることを望む気持ちがよく分かった。また、リーダーは、A男とのやりとりの中で、自分の接し方に問題があったと考えた。いずれも互いにコミュニケーションを図る上での自分の課題に気づききっかけになったと言える。また、多くの生徒が、任意に作ったグループに対し、「親

しい友達同士の方がよかった」という感想から、「みんなとの距離が短くなった気がする」といった好意的な受け止め方へと変化していった。このグループ活動が、友達の新しい一面を知ったり、今までとは違った交友関係をつくる機会となるので、そういう場を望むようになってきていると考えることができるのではないだろうか。これは、生徒同士が今までより結びつきが強まる場を提供したと言える。

#### (2) 相談室登校から学校や友達に目を向けるようになったか

相談室では、一人一人がそれぞれ違うことをしていることが多いが、この華道、茶道体験学習では、みんなで一斉に同じことに取り組んだ。これはめったにないことであり、一緒に活動している友達のことを意識するよい機会だと考えられる。相談室では、生徒同士が互いにコミュニケーションをとる機会はほとんどないが、友達とのつながりを求めていることがうかがえる。また、華道や茶道を「楽しかった」と感じた生徒が多かったことは、彼らにとって興味・関心のある内容であったため、主体的に取り組むことができたからだろう。その姿勢が、自分だけでなく一緒に体験した仲間のが気になったり、つらい正座を乗り越えることへとつながっていったと考える。

また、専門知識を持った講師の方が、第三者的な立場で接してくれたことで気楽に参加でき、講師による言葉かけなどが、学校に目を向けるきっかけとなった。

#### まとめと今後の課題

教室以外をフィールドとした体験活動は、人とのつながりをふだん以上に意識するものであり、だからこそ相手が何を考えているのかが気になる。そこでのコミュニケーションがうまくできれば、仲間との関係をより深めていく場となる。もちろん、ただ体験学習をやっても効果は少なく、振り返りがあってはじめて、体験学習の有効性が発揮されると感じた。指導者は、生徒が、それぞれの学習のための豊かな体験ができる場を設定し、仮説化するのを助けていくよう支援していくことが大切である。また、生徒の主体的な取組も大切な要素となるので、興味・関心のもてる内容を取り入れたり、そのために講師を招へいすることで、生徒の意欲を高め、よりよい取組へとつなげていけるとよい。そして、その取組が家庭での話題となり、保護者の学校への関心、期待度が高まってくれば幸いである。しかし、1つの体験学習から次の体験学習へとステップしていく際に、いかに自分の新しい試みを次に関連づけていくか、また、それに向けてどんな援助をしていくことがより効果的であるかが課題として残っているのも事実であり、今後さらに、研究を進めていきたいと思っている。

#### 主な参考文献

- ・「中1 不登校生徒調査（中間報告） - 不登校の未然防止に取り組むために - 」  
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2003）
- ・津村俊充 山口真人 編著 『人間関係トレーニング』 ナカニシヤ出版（1992）